

No. 15

博物館報



永池古墳出土 鷲を持つ人物（線影壁画）

この古墳は、杵島郡北方町大字芦原字永池にある、横穴式石室を内部主体とする小円墳である。

石室は羨道と前室と後室とより成り、南西に開口している。後室は床面奥行約 3.9m、間口約 2.3m、高さ 3m である。基底には大きな石を立て、据え、その上には割石や自然石を横にして積み上げ、少しずつつせり出して天井に達する。前室は床面奥行約 1.8m 間口約 2.1m、高さ約 1.8m で天井石は崩落している。

前室と後室は袖石で区画され、その床面にはいきい石を置いている。前室と羨道のさかいにも袖石が立ち、羨道は小さな割石で築成し、長さは現在約 4m、幅約 1.8m である。

壁画のある石材は縦約 90cm、横約 1m、厚さ約 20cm の扁平な安山岩の自然石で、玄室入口附近の羨道に埋もれていたもので、石室の閉塞石であったと推定される。

図文は、細い線影りで人物を主体に全面に描かれている、鮮明なのは、石材に向って右上部にみる長円形に羽毛状の飾りのある鷲を持つ高さ約 18cm の立像人物、その側に描かれた貴人、下方の鹿とみなされる小動物である。

この描画は、とくに習練された工人の手によらず、被葬者に近い人の手によって描かれたものと考えられ、呪的な意味を持つ供養のための図であろう。

鷲を持つ壁画は先年奈良の高松塚で発見された世の耳目を集めたが、然し素朴であり稚拙ではあるが、それよりも古くして遠い佐賀の地にてこれを見ることは興味深い。



永池古墳出土 鷲を持つ人物（線影壁画）	1
「郷土の先覚者書画展」紹介	2・3
「装飾古墳壁画展」紹介	4・5
佐賀県の野鳥目録(2)	6
新資料紹介	7
博物館日誌・行事お知らせ	8

展覧会紹介

郷土の先覚者書画展

主催 佐賀県立博物館

会期 昭和48年7月14日～8月10日 毎週月曜日は休館

会場 佐賀県立博物館 大展示室

講演会

日時 昭和48年7月28日(土)午後2時から

会場 佐賀県立博物館 中展示室

演題 近世美術史上における中央と地方について

講師 九州芸術工科大学教授 岸田勉氏

佐賀県は藩政時代、佐賀藩、唐津藩、対馬藩および天領にわかれ、その文化は中央の影響を受けながらも、先覚者をはじめ、多くの先人の努力によって肥前独自の発達をとげてきた。また幕末から明治維新にかけては、佐賀藩主鍋島直正、唐津藩主小笠原長国らのもとに多くの人材が養成され、黎明期の明治文化を築いた人々が多い。しかし、これらの方々のご遺作等は、これまで一般に紹介される機会が少なかったため、当館では、その直筆の書、画を一堂に展覧し、先覚者の業績と遺徳をしのび、これからの郷土文化の向上発展に資するために、この展覧会を企画した。

なお、ここでとりあげたのは、藩政時代から明治中期までの先覚者52名であるが、今回紹介しなかった人々については、資料の調査、収集ができ次第回をかきねて逐次紹介していく方針である。主な展示内容は次のとおりである。

洪 浩然	書屏風
大木 英鉄	竜天善神図ほか1点
広渡 雪山	夏景山水図
小原友閑齋	七夕の図ほか1点
広渡 心海	山水図ほか2点
鍋島 綱茂	子貢画賛ほか4点
山本 常朝	梁山和尚への返歌
多久 茂文	文庫記
永松 玄徳	与賀神社縁起図
吉武 法命	書簡2点
天竜 道人	松鷹図ほか1点
富田 才治	書簡
石井 鶴山	華堂閑宴祝文
三浦 子瑛	福祿寿図
鍋島 治茂	書「廣瀨」ほか1点
古賀 精里	「山色掃光」二行書ほか4点

白如齋成真	山水人物図ほか2点
古賀 穀堂	「欲送一生」二行書ほか1点
牛島 藍草	高砂老父母図
古賀 侗菴	「吾王清白」二行書ほか1点
長谷川雪且	門舞図
草場 佩川	竹画十二撰図屏風ほか4点
正司 考禎	家訓二行書ほか1点
鍋島 直興	古梅画賛ほか1点
武富 圀南	古梅画賛ほか1点
古賀 葵堂	「堤土銀靴」扇面ほか1点
柴田 花守	大原女図ほか1点
古川 松根	春草図ほか3点
鍋島 直正	「先妻後楽」二行書ほか3点
成富 椿屋	四季花鳥図ほか1点
古賀 茶溪	「吾非木偶人」三行書ほか1点
草場 船山	懸崖藍図ほか1点
今泉 賢守	蚕雪首首ほか2点
富岡 敬明	「一心齋」書ほか1点
枝吉 神陽	「秋日登飛鳥山」二行書ほか1点
島 義勇	「万代乎」二行書ほか1点
谷口 藍田	「陰雲無跡」二行書ほか1点
小笠原長行	「鴨緑有餘香」書ほか3点
小笠原長国	「閑看秋水」二行書
岸 天岳	桜下美人図ほか5点
高柳 快堂	山水図屏風
佐野 常民	石垣山詩ほか1点
中林 椿竹	明月図ほか2点
嗣島 種臣	富士山画賛ほか3点
大木 喬任	「魏文帝燕歌行」ほか1点
長谷川雪麴	能舞図屏風ほか5点
江藤 新平	「久庵己盡」四行書ほか1点
久米 邦武	久能山詩ほか1点
中原南天椿	寒山図ほか2点
鍋島 直彬	「示鹿城会諸員」四行書ほか1点
百武 兼行	マンドリンを持つ少女
西川 春洞	屏風画

先覚者の書画については、大正15年、肥前史談会発行の「佐賀先哲遺墨集」(87人を掲載)がある。また、先覚者の略伝を収録した著作は、「肥前国誌」(森 周造著 明治36年発行)「佐賀先哲叢話」(中島吉郎、水町義夫共著、大正2年発行)「西肥遺芳」(狩野雄一編、大正6年発行)「佐賀県教育五十年史上、下巻」(西村謙三編、昭和2年発行)「先覚者小伝」肥前史談会編、昭和4年11月特集号、昭和5年11月特集号、昭和6年11月特集号)「佐賀県大観」(佐賀師範学校編、昭和8年発行)「佐賀先哲叢話」(中島吉郎原著 太田保一郎国訳、昭和16年発行)などがある。

(学芸課 尾形善郎)



梁山和尚への返歌 山本常朝筆



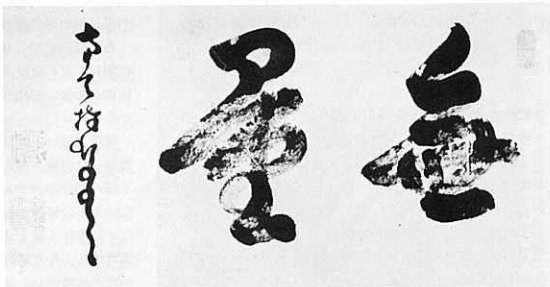
山水図 広渡雪山筆



菊紅葉山鳥図 長谷川雪塔筆



虎図 岸天岳筆



無量 中原南天棒筆

特別企画展紹介

装飾古墳壁画展

- ①主催 佐賀県教育委員会
佐賀県立博物館
- ②会期 昭和48年10月13日～11月4日
- ③会場 佐賀県立博物館

古墳の墓室の内部、外部に、彩色または彫刻などで絵画や文様をほどこした装飾古墳は、5世紀後半から7世紀にかけて営まれ、年代によって大陸文化の影響を濃厚に受けたものと、それを殆んど受けなかったものがある。

地域的には、九州有明海周辺福岡県、熊本県に多く分布しているが、北限は福島県にまで達している。

文様も直弧文・円文・三角文のように抽象化された呪術的なものから人物・舟・武器・動物・家など具象的絵画までである。これ等壁画、図文の流行は、古墳文化に異彩を放っている。

先年、奈良で高松塚古墳の極彩色壁画が発見されて以来、装飾古墳への関心が一段と高まってきた。

当館では、この機会に文化庁が昭和30年から東京芸術大学名誉教授日下八光画伯に委嘱して作成した装飾古墳の壁画模写および回復模写を中心に、近年発見された新しい資料をあわせて一堂に展示し、古代文化の解明と今は不明となった図文から古代人の心を汲みとり、更には、装飾古墳も十分な保存策を構じなければその消滅は時間の問題であろうといわれている今日、日本民族の文化遺産を守る意識高揚のためにこの壁画展を企画した。

この壁画展に対して、文化庁をはじめ福岡、熊本両県教育委員会、関係市町村教育委員会のご出品や、資料蒐集に寄せられているご協力に対し深く感謝の意を表したい。

なお、この特別展開催初日である10月13日には、日下八光氏による古墳壁画に関する特別講演会を予定している。

西隈古墳 佐賀市金立町西隈

佐賀市の北、背振山塊の南麓ゆるやかな丘陵上に位置する直径約30m、高さ約4m、2段築成の円墳である。

羨道は西に向って開口し、長さ約2m、幅約1.2mである。

支室は、奥行き約3.15m 幅約1.3m 高さ約1.7mで比較的扁平な変成岩と花崗岩とを小口積みし、天井は扁平な3枚の石で覆われている。

石棺は凝灰岩で作られ、長さ約2m、幅1.1m、高さ

1.3m、身は4枚の板石でかこみ、蓋石は蒲鉾形の1枚石で4個の繩懸け突起が造り出された横口式家形石棺で、入口には扉石をはめ込むようになっている。

円文と三角文の線彫りは、石棺の前面に施されている。

円文は直径約7cmの大きさで、円心に小さな孔を認めることによってコンパスが使用されたものとみなされる。三角文も均整がとれており、縁歯状に定規を使って正確に鋭く

表現されている。これも死者の魂を守るためのものであろうが、石棺の全面に彩色された赤い丹が更に神聖で荘厳な雰囲気を作り出している。

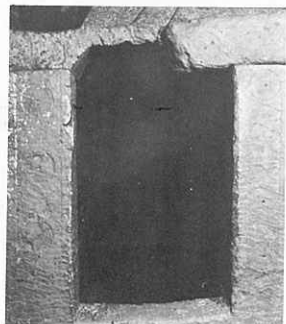
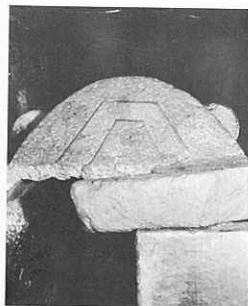
龍王崎6号墳

この古墳は、佐賀県の西南部、杵島郡有明町大字深浦にあって、杵島山の尾根が東へ細長く伸びる標高約30mの低丘陵の端に築成された古墳群の一つである。

石室は、前室と後室それに羨道部よりなる複室墳で南に開口している。羨道と前室および前室と後室は袖石や仕切石によって境され、羨道と前室の天井石は欠失している。

家屋文様は、前室と後室とを境いする後室に向って左側袖石に力強く線彫りされ、全高41cm、棟の長さ42cm、基部の部分38cmである。屋根の部分には6本、腰の部分には4本の縦線が引かれ、屋根と腰の間、腰の中央附近にそれぞれ1線を入れている。これは切妻の高床建築を簡略化し、ただ単線を用いて表現した構図であろう。

この古墳群からは金銅製冠や垂飾付耳飾が出土し注目されるが、6号墳からは金銅製鉄止金具ほか耳環、鉄鎌、



西隈古墳石棺 身の部の図文

須石器多数が前室と羨道より出土している。



童王崎六号古墳
線影家屋

勇猛寺古墳

勇猛山は標高 258m、佐賀県杵島郡北方町大字芦原に属し、その東・北・西この三方へのびる山麓から中腹にかけて古墳は分布する。

勇猛寺古墳は、この山の東側中腹に位置する古墳である。

この古墳は、横穴式石室を3室内蔵する円墳で、現在約20mの封土を残している。このような古墳は県内他に例をみない特異なものである。

石室は封土の中央に1室、その両端約 4.5m離れて各々石室が営まれ、東側から1号石室、2号石室、3号石室とする。いずれも石室の主軸はほぼ南北をとり、南に開口している。古墳の崩壊の度はひどく1号石室の天井石は、羨道部が崩落し、他はひさし状にかろうじて残り、3号石室は天井石すべてを失っていて、石室の形状をとどめるのは2号石室のみである。

図文は各石室に見られるが、1号石室には西側壁の基底をなす巨石と袖石に格子文が刻まれている。

2号石室の図文は多様で、奥壁には家屋とみられる図柄を連続線刻したものほかに一面に斜格子文が配されている。この斜格子文は東、西の側壁にもあり2号墳の文様の主体をなしている。また東側壁中央、縦約30cm、横約45cmの石材いっぱいには、帆柱を持つと思われる構造船が線彫りされている。

3号石室には、東側壁と東側袖石に人物と斜格子文様とが描かれている。人物は東側壁のいくぶん奥壁寄り、石室床面より約70cmの高さにはほぼ台形をなす底辺の長さ約50cm、高さ25cmの割石に線彫りされ、体長約20cmと13cmの男女と思われる2体を表現している。



勇猛寺古墳三号石室東側壁
線影人物



勇猛寺古墳二号石室東側壁
線影舟

勇猛寺古墳や龍王崎6号墳にみられる具像的な線影文様、何をあらわしているのかわからぬ形、無意味に思える無数の線文を持つ古墳は、有明海西岸地方をたずねても杵島地方は勿論、その北方小城・多久の地や、南には長崎県北高来郡高来町湯江、善神さん古墳、同じく北高来郡小長井町丸尾、丸尾古墳、同町長戸、鬼塚古墳にも見ることができる。これら図文は、呪術的な意味を持つ供養図であろうが、この図文を通して同じ生活圏に属したであろうことが知られる。(学芸課 志佐博彦)



長戸鬼塚古墳
前室南壁
壁面

佐賀県の野鳥目録 (2)



カワセミ カワセミ科
 かつては堀、クリーク近くの近くでよくみられた
 スズメぐらいの大きさでルリ色の美しい水鳥。
 クチバシが大きく、魚類を捕食する。

ミヤコドリ科

+ミヤコドリ、旅鳥、有明海

チドリ科

コチドリ、旅鳥、河原

イカルチドリ、冬鳥、旅鳥、玉島川、松浦川

シロチドリ、留鳥、有明海、松浦川

メダイチドリ、旅鳥、浜、塩田川、唐津

ムナグロ、旅鳥、浜、塩田川、松浦川

ダイゼン、冬鳥、浜、塩田川

△ケリ、冬鳥、神崎、川副

タケリ、冬鳥、東与賀、有明、唐津

シギ科

キョウジョウシギ、旅鳥、浜

トウネン、冬鳥、有明海

ヒバリシギ、旅鳥、塩田川

ハマシギ、冬鳥、旅鳥、有明海

コオバシギ、旅鳥、有明海

オバシギ、旅鳥、有明海

ヘラシギ、旅鳥、有明干拓、浜、川副

キリアイ、旅鳥、浜、唐津

ツルシギ、旅鳥、浜、唐津

アカアシシギ、旅鳥、松浦川

アオアシシギ、冬鳥、有明海、松浦川

+カラフトアオアシシギ、旅鳥、有明海

クサシギ、冬鳥、有明干拓、松浦川

タカブシギ、旅鳥、各地

キアシシギ、旅鳥、各地の川、ガタ地

イソシギ、留鳥、冬鳥、有明海、松浦川

ソリハシシギ、冬鳥、有明海、松浦川

オグロシギ、旅鳥、浜、塩田川

オオソリハシシギ、旅鳥、浜

タイシャクシギ、旅鳥、有明海

ホウロクシギ、冬鳥、有明海

チュウシャクシギ、旅鳥、有明海、松浦川

ヤマシギ、冬鳥、大野原、馬渡島

タシギ、冬鳥、水辺

オオジシギ、旅鳥、有明干拓

+アオシギ、旅鳥、山地

ヒレアシシギ科

△ハイイロヒレアシシギ、旅鳥、唐津湾

アカエリヒレアシシギ、旅鳥、北部海上

ツバメチドリ科

△ツバメチドリ、旅鳥、S、4、9、7有明海

カモメ科

ユリカモメ、冬鳥、有明海、唐津湾

セグロカモメ、冬鳥、唐津湾

+オオセグロカモメ、冬鳥、唐津湾、有明海

カモメ、冬鳥、唐津、有明海

ウミネコ、冬鳥、北部海上、海辺、有明海

ズグロカモメ、旅鳥、塩田川、浜

△ミツエビカモメ、冬鳥、唐津、浜崎

+クロハラアジサシ、

アジサシ、夏鳥、有明海

コアジサシ、夏鳥、有明海

+クロアジサシ、旅鳥、有明海

ウミスズメ科

ウミスズメ、冬鳥、北部海上、有明海

カンムリウミスズメ、冬鳥、北部海上

ハト科

アオバト、漂鳥、冬鳥、各地に少し。

△カラスバト、留鳥、漂鳥、馬渡島、加唐島

キジバト、留鳥、漂鳥、冬鳥

ホトトギス科

△ジュウイチ、夏鳥、山地

カッコウ、夏鳥、山地

ツツドリ、夏鳥、山地

ホトトギス、夏鳥、山地 (以下次号へ)

新資料紹介

「佐賀風景」

青木繁作



佐賀風景 油彩、板 1910年 22.5×33cm

この作品は、もと両面に描かれた板絵の裏面にあたるもので、現在は表裏二面に分れ各々1枚の作品となっている。表にあたる作品には署名があり1910年作であることがわかる。

署名のある、人物と馬を配した方は、これまで筑肥風景（あるいは筑後平野）と呼称されてきたが、1910年にはすでに青木が佐賀の地にあったこと、またこの年の秋には青木の病状が悪化し制作が不可能であったこと、更には描かれた田園の様子からして、おそらく佐賀近郊の初夏の麦刈り風景を写したものと思われる。

一見してそれとわかる風物を、小さく纏まった構図の中に軽い筆触で描きあげたこの風景図は、明るい彩色の下に佐賀平野の拡がりを含み細かく仕上げている。

一方、今回寄託された対の風景は、同じく佐賀近郊の農家を描いたものと思われるが、署名入りの風景とこの署名なしの風景とは随分趣を異にしている。

例えば、小さな画面の中での構図の大胆さ、細部にとらわれない伸びのあるマティエール等は、彩色の上でいささか未完の部分を見せながらも、かつての海景（1904年）や雪景（1906年）に見られる青木の構想力の豊かさと彼独自の筆触を窺わせる。

ところで、この絵の描かれた1910年の初夏といえ、放浪の身にある青木は、すでに前年の7月から佐賀の地にあり、この地で幾つかの作品と、手記、歌集を残し、また画会を開いたりもした。

「青葉の佐賀？、一寸耳に清く響きますね、此平野の沙地に築かれたる都市が殺風景に物質的に面かも思切つて擗猛な状態に古びた上を掩うて松樹、椴、白楊、河柳などが其潤葉を堅く柔かく真夏の刺しい日光を浴びて居る處は一種の痛烈な近代思潮を一部象徴して居ると思われ、夫から青葉に包まれた部落の間に点在する置碁の屋根が殊の外目を引く、勿論佐賀から青葉を取去った跡は醜いあばらの形骸だ、左すれば多布施の清流と此青葉とは佐賀の生命かも知れぬ」

青木の目に映じた青葉の佐賀は、晩年の彼の焦躁と失意と期待との象徴でもあった。

「青葉若葉といふと直ぐに来る可き夏を想像して宇宙の活力、大自然の偉大なエネルギーを感ぜず」にはおれない彼は、この小さな未完の板絵の中に、この地の人々の眼を忘れ、ひそかな意欲をこめていたように思える。

（文中「」内はいづれも「仮象の創造—青木繁」による）
（学芸課 三輪英夫）



佐賀風景 油彩、板 1910年 21.5×31.5cm

博物館日誌

4月18日	小笠原フサ氏から小笠原長生氏の書画25点寄贈を受ける。	5月31日	「近代文学展」展示打合せ(応接室)
4月26日	「近代文学展」展示打合せ(応接室)	6月4日	鹿児島県知事金丸正幸氏、他2名施設調査のため来館
4月27日	「郷土の先覚者書画展」展示打合せ(応接室)	6月5日	佐賀県中学校社会科研究会総会(中展示室)、「野鳥展」終了(総観覧者数4,713名)
5月17日	NHK総合テレビ「話題の窓」で「佐賀の野鳥」放映 「近代文学展」打合せ(応接室)	6月11日	日本学術振興会会長茅 誠司氏、青少年育成国民会議専務理事坂井隆治氏常設展観覧九州大学名誉教授松下久道氏、同野田光雄氏、京都大学助教授吉川恭三氏常設展観覧
5月22日	関行丸古墳出土物一括県重要文化財の指定を受ける。	6月13日	佐賀新聞社原口昭夫文化部長新入社員6名を引卒し、新入社員研修のため来館
5月26日	駒沢大学助教授倉田芳郎氏、同大博物館学講座受講学生の実習を当館に依頼のため来館	6月15日	佐賀美術協会創立60周年記念展開場(大・中展示室・佐賀玉屋)
5月30日	ブラジル在住原美代子氏からブラジルの岩石標本の寄贈を受ける。	6月16日	職員異動発令

行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

	常	設	展	
佐賀県の歴史と文化展	48年4月1日～8月10日 49年1月10日～3月31日	1、2、3号展示室	月 曜 休 館	

企		画		展	
展 覧 会 名	会 期	会 場	備 考		
郷土の先覚者書画展	48年 7月14日～8月10日	大展示室	常設展と併設(月曜休館)		
日 展	8月25日～9月23日	1・2・3号・大・中展示室	会 期 中 無 休		
理 科 作 品 展	9月29日～10月7日	大・中展示室	"		
九州沖縄現代工芸展	9月29日～10月5日	3号展示室	"		
装飾古墳壁画展	10月13日～11月4日	1・2・3号・大展示室	"		
第23回佐賀県美術展	11月17日～11月25日	1・2・3号・大・中展示室	"		
佐賀県高等学校美術展	11月29日～12月4日	大展示室	"		
近代文学展	12月1日～12月23日	1・2・3号展示室	月 曜 休 館		
新遺跡出土資料展	49年 1月20日～2月8日	大展示室	常設展と併設(月曜休館)		
鍋島藩窯展	3月5日～3月24日	大展示室	"		

◎職員異動(6月16日付)

- 転入 総務課庶務係長 酒見四郎(土地改良第一課庶務係長より)
- 転出 社会教育課庶務係長 西村正剛(総務課庶務係長より)
- 兼務解消
文化課文化財係事務職員 木下 巧博物館の兼務を解く。
学芸課資料係学芸員 森醇一朗文化課の兼務を解く。
佐賀県体育館技師 小森 清の博物館の兼務を解く。

博物館報	第 15 号
発行年月日	昭和 48 年 7 月 1 日
編 集	古 賀 秀 男
発 行	佐賀市城内一丁目15-23 佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社